

先進校に学ぶキャリア教育の実践

総合学科の系列をつなぐ・こえた学びで 「地域のスペシャリスト」を育成

石巻北高校 (宮城・県立)

普通科・農業科を改編し、総合学科高校として生まれ変わった石巻北高校。
授業外の活動も含めて総合学科の特長を生かした「3つの学びのステージ」を用意し、
地域を巻き込む教育を展開してきた同校には、どのような生徒たちが育っているでしょうか。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍6次産業化 🔍経営・販売実習 🔍地域との交流 🔍放課後活動 🔍高大接続

学校再生のため 悲願だった総合学科改編

宮城県で第2の人口規模があり、東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市。そのやや内陸部に位置する県立石巻北高校は、2010年度に河南高校（普通科・農業科）が改編されてできた総合学科の高校だ。15年度から同校の校長を務める瀬谷和夫先生は、前身校である河南高校の状況についてこう聞いているという。

「若者の農業離れで農業科は盛り上がりがない。就職志望者が多い普通科は、地域の景気減退による就職難で思うような進路に進めない。そんな状況で生徒は目標をもちにくく、課題の多い学校だったようです」

90年代半ば、河南高校時代の教員はそんな状況を打開しようと、総合学科への改編構想を打ち出した。県内にも総合学科高校ができた時期で、「生徒が興味・関心に合わせて学べる自由度の高い教育課程でなら、本校生徒の力をもっと伸ばせるのではないか」との期待があったという。しかし、県の財政面の問題もあり、実現までに要した年月は実に10年以上。ようやく10年度に総合学科高校として再出発を果たすことができた。

地元志向の生徒が多い同校が、総合学科改編時に掲げたスローガンの1つは「地域のスペシャリストを育成する」だ。昨年度まで同校に在籍し、改編にも関わった現・石巻支援学校教頭の山崎賢一先生は

こう振り返る。

「地元にも多様な産業があるので、選ばなければ生徒は何かしらの職に就けます。しかし、何でもいいではなく、目標をもって高校生活を送ってほしい。それまでも一部の教科で行っていた地域連携を学校ぐるみで充実させることで生徒のモチベーションを高め、地域で活躍できる人材を育てていこうと考えました」

授業以外にも 学びのステージを用意

「食農」「家庭」「経情」「教養」「進学」の5つの系列をもつ総合学科としてスタートをきってから（図1）、教育方法の模索は続いた。そのなかで掲げるようになったのが「3つの学びのステージ」の充実だ（図2）。

「第1のステージ」とは、系列の学びを中心とした教育課程の授業を指す。学びの場を校内だけにとどめず、地域の企業、



東日本大震災後の物資不足のなか、生徒は同校で採れた野菜をリヤカーに乗せ、市内仮設住宅周辺を巡回して販売した。



校舎が津波被害に遭った宮城県水産高校が一時期、石巻北高校内に間借り。「交流水田」で合同の田植えや稲刈りを行った。



School Data

1925年開校／総合学科
 生徒数557人(男子274人・女子283人)
 進路状況(2016年3月実績) 大学27人・短大7人・
 専門学校56人・就職102人
 宮城県石巻市鹿又字用水向126
 TEL 0225-74-2211
 URL http://ishikita.myswan.ne.jp/

Outline

1925年、女子教育の重要性を訴えた地元の素封家により宮城県鹿又実科高等女学校として開校。学校統合や改編などを繰り返し、66年から河南高校(普通科・農業科)。2010年に石巻北高校に校名変更、および食農・家庭・経情・教養・進学との5つの系列をもつ総合学科へ学科改編。「人の数だけ道がある」「めざせ！地域のスペシャリスト!!」がキャッチフレーズ。15年度にキャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰。

図1 石巻北高校の5つの系列(2年次～)

系列	ねらい
食農系列	稲や野菜などの農産物や草花の栽培と、経営に関する知識について学ぶ。また、食品製造実習を通して、食品の加工や、食品を衛生的に取り扱うことのできる安全管理能力を身につける。
家庭系列	介護福祉・看護・食物・被服・住居・保育の基礎を、実験実習や地域の施設訪問を通して体験的に学習。また、地域との連携を密にして、郷土食の継承や高齢者向けの献立の開発に取り組む。
経情系列	経営・経理・販売の基本から、PC、ビジネスマナー、経営全般の専門知識を深く学習し、会社や店舗を経営する起業家や経営後継者としての実力を身につけた経営のリーダー養成を目指す。
教養系列	国・数・社・理・外の5教科を重点的に学習し、一般教養を広く身につけ、地元企業が求める資格を積極的に取得し、希望する進路の達成を目指す。また、芸術科目も重視し、豊かな感性を育てる。
進学系列	人間・社会・自然についての知識、理解を深め、進学へ向けた学習を進める。また、小論文を書く力も強化する。大学や看護医療系学校への進学を希望する生徒・公務員受験生徒を対象とした系列。

保育所や介護施設と連携した活動や、コンテストへの挑戦などを取り入れて充実を図っている。

授業に力を入れるのは珍しいことではないが、それ以外に第2のステージとして「系列をつなぐ学び」、第3のステージとして「系列をこえた学び」も重視している点が同校の特徴だ。このようなステージを用意するようになった背景には、系列とクラス編成の試行錯誤がある。

生徒が系列に分かれるのは2年次からだ。1年次に主要5教科を中心に学びながら、「産業社会と人間」を軸に自分の将来の方向を考えたうえで系列選択を

図2 3つの学びのステージ

<p>第1のステージ</p> <p>「通常の授業」の実践</p> <ol style="list-style-type: none"> 各教科の必修科目・選択科目 各系列の専門科目 「産業社会と人間」等 	<p>第2のステージ</p> <p>「交流ひろば販売所(と・ら・ま・い)」の経営販売実習、店舗経営等</p> <ol style="list-style-type: none"> 農産物等の栽培 農産物等の加工 農産物等の販売 	<p>第3のステージ</p> <p>「放課後活動」の充実</p> <ol style="list-style-type: none"> 生徒会活動 部活動 放課後ゼミ(系列、教科、進路関連、各種資格の講座等)
---	---	--

行う。2・3年次は10単位以上の選択科目があるが、系列ごとに選択科目を類型化し、興味・関心に任せて脈絡のない科目選択をさせないようにしている。例えば食農系列の選択者は、2年次では「農業と環境」「総合実習」「農業情報処理」「食品製造」を科目選択することになるという具合だ。

2年次からのクラス編成は、1期生の時は系列混成によるものだった。しかし、「それでは授業時間以外に系列でまとまった活動がしにくく、系列の所属意識は薄れがちだった」と山崎先生。2期生からは系列別クラス編成に変更し、一部を

第2、第3のステージの内容について順に見ていこう。

系列を「つなぐ」役割をもつ第2のステージの中心的な活動は、地域交流ひろば販売所「と・ら・ま・い」の開催だ(図3)。5月～翌年1月まで月2回(12・1月は各1回)、放課後の30分間、同校生徒が育てた米や野菜、花き、それから作った米粉パンや味噌などを、校内に設置した販売所で地域住民に販売する。いわば校内に開かれる「道の駅」だ。

「例えば1本50円の大根も、漬物に加工すると200円になります。1次産業に2次産業を掛け合わせて商品価値を何倍にも高め、それを3次産業である販売まで手掛ける。と・ら・ま・いは、6次産業化の体験がひととおりできる場です」(農場部長・高橋伸芳先生)

除いて選択科目もクラス単位で授業を受ける体制にした。これにより系列の学びは深めやすくなった一方で、新たな課題が浮上した。

「系列別クラス編成は、総合学科の良さの1つである、多様な方向性をもつ生徒同士の学び合いには物足りなさがありました。我々は専門学科をつくったわけではない、総合学科の特徴をどう生かしたらいいか。そんな議論が、第2、第3のステージとして課外の学びを充実させることにつながりました」(山崎先生)

販売所の協働運営で推進する系列同士の学び合い

図3 交流ひろば販売所「とら・ま・い」と各系列等の関係



より運営される。販売する商品は、食農系列が栽培した農産物や、それを加工・製造したもの。家庭系列は販売商品を使ったレシピを考案し、当日はその試食品やレシピを書いたチラシを配布する。精算業務をはじめ店舗経営全般を担当するのは経情系列だ。教養系列は販売補助や駐車場の整理などの裏方を担当する。進学系列は「とら・ま・い通信」を編集・発行するなど広報活動を行う。

「例えば家庭系列であれば、食農系列に今の旬の食材などを聞きに行つて、当日配布するレシピのヒントをもらいます。また、経情系列はレジでお客様の対応をするなかで、仲間の作った付加価値の高い商品の売れ行きを目の当たりにします。こうした協働により、系列間の垣根が低くなつていと感じます」(山崎先生)

毎回、地域住民にぎわう「とら・ま・い」は、日頃の学習活動や部活動の成果を地域に発表する場でもある。「もう大根ないの?」「このポップコーンおいしい!」...そんな会話を通じて地域住民は同校の教育を知り、同校生徒は自分たちの学びと地域とのつながりを感じる。近隣の農業高校が栽培した果物や支援学校が製作した小物を受託販売するなど、学校間の連携も進んでいる。

企画部長の山本浩人先生は、「とら・ま・い」の効果と今後の課題をこう語る。「勉強に積極的ではない生徒も、裏方の仕事に前向きに責任感をもつてがんばっていたり、売り方を生徒自身で工夫する姿が見られます。地域の方々に喜んでい

ただけることが、彼らの大きな励みになっているのでしょう。さらに今後は、生徒側がより主体的に活動をリードするような体制を目指したいと考えています」(山本先生)

放課後の多彩な講座で主体的な学びを後押し

「第3のステージ」と位置付けるのは、系列を超えて学習する放課後活動だ。実用英語技能検定や危険物取扱者試験の対策講座など、放課後の50分間を使った多種多様な「放課後ゼミ」を開講(図4)。生徒は各自の進路達成やキャリアアップのために自主的に選択し学んでいる。年次・系列によらず受講できる講座も多く、例えば3年次が受講できる全系列共通の講座数は30を超える。また、一般教養体験学習会など系列独自の講座は1年次も受講可能で、系列選択の参考としても役立つ。

この「放課後ゼミ」のラインナップに、昨年度から石巻専修大学との高大接続事業による講座が加わった。これは生徒が教材費・交通費のみの負担で同大学の講座を受講できる制度。石巻北高校の卒業単位の一部として認められるとともに、同大学の単位も取得できる。今年度は4~8月、2・3年次向けに「コンピュータ演習」「心理学」「総合科目I」の3講座が開講され、24人が単位認定された。「5カ月間、毎週、放課後に大学まで通うのは大変ですが、想定以上の生徒が受講しています。就職希望の生徒も、大学



元 同校企画部長
(現 石巻支援学校教頭)
山崎賢一先生



農場部長
高橋伸芳先生



進路指導部長
小山 栄先生



教務部長
菅野 準先生



企画部長
山本浩人先生



教頭
大枝 守先生



校長
瀬谷和夫先生

図4 「放課後ゼミ」で全系列共通で 受けられる講座の例

◎ 石巻専修大学科目履修
◎ 実用英語技能検定講座
◎ 硬筆書写技能検定講座
◎ 危険物取扱者試験対策講座
◎ 日本漢字能力検定講座
◎ ニュース時事能力検定講座
◎ フォークリフト運転技能講習事前学習会
◎ 家庭科各種技術検定事前学習会
◎ 数学検定学習会
◎ 夏季課外学習会
◎ 日検情報処理技能検定対策講座
◎ 歴史能力検定講座
◎ 小型車両系建設機械特別教育講習事前学習会
◎ 全商ビジネス文書実務検定対策講座
◎ 全商簿記実務検定・情報処理検定対策講座

※このほか農業クラブ活動や家庭クラブ活動など、各系列が設置する講座もある。

の学びを体験してみたいと参加しています」(教務部長・菅野準先生)

また、今年度から、従来より第2、第3のステージの位置づけで行われてきた放課後や土日、長期休業中の生徒の活動を、学校設定教科科目「社会活動」として単位認定する制度を作った。年度の最初と最後の事前・事後指導は科目選択者全員で行うが、残りの30単位時間分の活動内容は各自で計画を立てて実行する。地域における植栽活動や特別養護老人ホームなどでの奉仕活動のほか、「と・ら・ま・い」での販売や接客、「放課後ゼミ」の技能審査に向けた学習や農業クラブの活動など、幅広く活動内容として認められる。

「これまで生徒が自主的に取り組んできたことを、単位という形でしっかり認めて応援していこうというものです。およそ3人に1人の生徒が科目選択し、途中で諦めることなくがんばろうという雰囲

気が強まりました」(菅野先生)

**「地元の力になりたい」
生徒が宿す地域への思い**

かつて困難校として知られていた同校だが、独自の教育方法を編み上げ、生徒が落ちていて生き生きと学ぶ人気校となった。生徒の進路状況も変化した。全国的な傾向と同様に進学希望者は増加しているが、進路指導部長の小山 栄先生はその内容の変化に注目している。

「目指す大学、進学地域、学部・学科が多様化しており、よく考えしっかり選ぶようになったと感じます。また、早い段階から将来を考える機会が多いからか、就職の動きも早くなり、最初の就職試験から挑戦する人数が増えました。就職後の離職率の低下も顕著です」

変化の要因は、入学者層が変わったことだけではないと、瀬谷校長は考える。

「河南高校時代も真面目に学びたい生

Interview

大学は県外へ。 でも、卒業後は戻って地域のために働きたい

●私はずっとあがり症で人前で話すのがすごく苦手だったので、それを克服しようと生徒会長に立候補しました。「と・ら・ま・い」には生徒会も一役買っています。中学生向けの高校紹介ビデオで「と・ら・ま・い」を紹介したり、生徒会発行の校内新聞に記事を載せるなど、校内外に向けて盛り上げようとがんばっています。



進学系列3年
生徒会長 久保真希君(写真左)
生徒会(会計) 阿部瑞希さん(同右)

卒業後は、作業療法士になるために、岐阜県の大学に進学する予定です。資格を取って経験を積んだ後、地元に戻ってこれからの高齢化社会を支えていけたらと思っています。東日本大震災直後の大変だった時、支援物資を分けていただくなどお世話になった地元の方たちに、今度は自分が力になりたいです。(久保君)

●他県の高校の生徒会と交流したり、「世界津波の日」高校生サミットで海外の高校生に自分の体験を話したりする機会をもつことができました。そのなかで、少しでも多くの人に震災について知っていただけて防災につなげる活動をしていきたい、という気持ちが一段と強くなりました。

私は将来、中学校の国語の先生になるのが目標で、そのために埼玉の大学に進学します。大学に行っても、周囲に自分たちの被災体験を伝えるつもりです。でもやはり、最終的には地元に戻って、復興のために力を尽くしたい。先生になって、子どもたちに東日本大震災について伝えていきたいと考えています。(阿部さん)

徒や力のある生徒もいたのですが、彼ら学びに向かわせる仕組みが十分ではなかったということではないでしょうか。今は、学びたい生徒が主役になれる学校。入学時から将来に目を向けさせる教育プログラムや、自分の興味・関心に沿って学べるカリキュラムにより、生徒の力をしっかり伸ばしていきたいと考えています」(瀬谷校長)

地域にはさまざまな面で東日本大震災の影響がまだ残る。震災当時に小学生で気持ちの立て直しが難しかった世代が高校生になる時期を迎え、今後は生徒の精神面のフォローが一層、重要になってくる。また、防災のために石巻を離れる家庭も多く、急速な少子化は一帯の高

校に共通する課題だ。

「総合学科改編で大きな飛躍を遂げましたが、それで終わりではありません。地域の状況も踏まえて変化に対応し、必要な教育の改善に取り組んでいく必要があります」(瀬谷校長)

将来やりたいことを問うと、「地元でみんなのために働きたい」と語る生徒たち。同校生徒はもともと地元志向が強いというが、単に「地域で働く」ではなく「地域に貢献する」という気持ちが育つことは、地域と共に「地域のスペシャリスト」育成を推進してきた同校の教育と無関係ではないはずだ。彼らはきっと、地域の再生・発展を担う大きな力になることだろう。